

2017年2月26日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 22 章 1～30 節

説教：あなたは私のともしび

はじめに

イスラエルに立てられた最初の王がサウルと呼ばれる人でした。その後を継いで二代目の王となったのがダビデですが、彼がどのようにして王となったのか、短く紹介しておきます。彼は、あるとき一発の石でゴリアテという敵を倒したことでサウル王に召し抱えられ、頭角を現していきます。戦いに出れば連戦連勝。おまけにハンサムでしたから、世の女性たちが流行歌を歌って追いかけるほどの大スターになっていきます。サウルは、自分よりもダビデばかりが注目されるのがおもしろくありません。今で言うパワーハラメントでダビデをいじめ、殺そうといたします。ダビデはたまたま逃げたのですが指名手配されてしまいます。イスラエルの国には安全な所はなくなり、敵の地に亡命してしまいます。やがてイスラエルに大きな戦争が起こり、サウルとその息子であるヨナタンが戦場で倒れてしまいます。王と世継ぎを同時に失ったわけですから、イスラエルは大混乱状態になります。これを見たダビデは、祖国を救うためにイスラエルに戻り、イスラエルの王に迎えられました。ところが、ほっとする間もなく今度は息子のアブシャロムが父に公然と刃向かうということも起きました。その騒ぎもアブシャロムが死んだことで一件落着となり、イスラエルはやっと一つの国にまとまります。これが 21 章までのあらすじです。

その続きが今日開いている 22 章です。ここにはダビデの歌が出てきます。大変なこと

が沢山あったけれど神はダビデを救ってくださった。よかったよかった。そんなふうに読めなくもありません。でも本当にそうなのか。考えていきます。

1 サウルの手から救い出された日とはいつのことか

1) 殺されそうになったとき

22 章 1 節に「特にサウルの手から彼を救い出された日に」とあります。それが具体的にいつのことなのかは、わかっていません。それでもこのことばからいくつか思いつくことがあります。ダビデがサウルに仕えていたときのことです。サウルが、ダビデを殺そうとして自宅に殺し屋を差し向けてきたことがありました。このことにいち早く気がついた妻のミカルは、ダビデの代わりに人形をベッドに置いて時間稼ぎをします。その間にダビデは寝室の窓から逃げて難を逃れたという事件がありました。「サウルの手から彼を救い出された日」とは、このことかもしれません。

あるいは、こういうこともありました。ダビデが全国に指名手配され、このままでは殺されるのは時間の問題、そこで思い切って敵の所へ逃げ込んで身を隠そうと計画します。でも、つい先日まで戦っていた相手の所です。かなり危険な賭です。当時、写真はありません。ダビデを直接見た者も多くはなかったので、見つからない可能性は確かにあった。ところが、検問所に行くとき係員がおまえはダビデではないかと疑い出します。そこでどうし

たか。ダビデは、みなが見ている前でよだれをたらし、きたない格好をして、気が違ったかのようなふるまいをして危機一髪難を逃れました。これも「サウルの手から救い出された日」と言っていいいでしょう。

ほかにもたくさんエピソードがあります。いずれも私たちが思い浮かべるのは、ダビデが殺されるそうになったけれど助かったこと、それが「サウルの手から救い出された日」であると考えます。

## 2) 祭司アヒメレク事件

でも、それだけなのでしょう。そんなに単純ではないように思います。というのは、祭司アヒメレク事件のことがあるからです。

ダビデが全国に指名手配されたとき、食べる物も武器もないという状態になったことがありました。だれかの家に行って頼むことはできません。そんなことをすれば自分の居場所を知らせることになり、相手もダビデを助けたという嫌疑がかけられ、迷惑をかけることにもなります。悩んだ末に向かったのは、昔からよく知っていて信頼できるアヒメレクという人の所でした。そこでパンと剣を受け取り、ダビデは姿を隠します。ところがそこにスパイが隠れていて、すぐにこのことがサウルに知らされ、アヒメレクとその一族は全員殺されてしまいます。

18 節に、「主は、私の強い敵と、私を憎む者から私を救い出された」とあります。「強い敵、憎む者は自分を殺そうと狙ってきたけれど、救われた。助かった。感謝します。」と読むことができるでしょう。でももしそれだけだというのなら、アヒメレクのことはどうなるのでしょうか。ダビデは、自分がアヒメレクを殺したようなものだ。生涯そのことで

悩んでいたはず。そんなことは忘れ、ただ自分は救われて感謝しますと言っているとはとても思えません。

## 2 サウルを殺そうとした日

### 1) 油注がれた者を殺してはならない

ではどうしたらよいか。強い敵、私を憎む者をもっと広く捉えてみたらどうでしょう。ダビデを殺そうとする者を指すのはもちろんですが、ダビデ自身のうちにあつて、ダビデを死に追いやるものと考えてみるのです。いったいそれはなにのことか。これも具体例を見てきます。

ダビデはいつも追われる側でしたが、それでもサウルを殺すチャンスが奇蹟のように巡ってきたことがありました。サウルは目の前にいてダビデがいることはまったく気がついていません。ダビデはこれを見たとき、いままでこの男に散々に苦しめられてきたことが走馬燈のように思い出されたでしょう。自分はいつも王に忠実に仕えようと一生懸命働いてきたのです。でも一生懸命働けば働くほど、憎まれ、ねたまれ、いのちまで狙われる。その結果、財産も名誉も家族も失いました。こんな理不尽な話はありません。こんな男を殺したい。今がチャンスです。あとは剣に手をかけ、それを振り下ろすだけです。

しかし、ダビデはそこで大切なことを思い出してしまう。ダビデはこう言います。

「私が、主に逆らって、主に油注がれた方、私の主君に対して、そのようなことをして、手を下すなど、主の前に絶対にできないことだ。彼は主に油注がれた方だから。」(第一サムエル記 24 章 6 節)

### 2) 死のわなか私に立ち向かった

人の目にはまたとない千載一遇のチャンスと見えたその瞬間でした。ところが、そこには神に対して逆らうという大きな罪が待ち構えている瞬間でもあったのです。ダビデはそこで苦しみます。八つ裂きにしたくらい憎い。アヒメレクを殺した相手です。でももし殺したなら、神に逆らうことになります。自分も死ぬことになります。その狭間に立たされたときの痛み。それが5節に書かれているのではないのでしょうか。「死の波は私を取り巻き、滅びの川は、私を恐れさせた。よみの綱は私を取り囲み、死のわなは私に立ち向かった。」

ダビデも主に油注がれた者であったことを思いだしてください。皮肉なことですが、サウルを殺すことは、そっくりそのまま自分を殺すことになってしまうのです。18節の「強い敵」、「私を憎む者」。だれかほかの人のことではありません。主に油注がれた方であるサウルを憎み、殺そうという思い。全部自分の中であって、それが全部強い敵だったのです。ダビデはそれらと必死に戦います。でも言うのです。「彼らは私より強かった。」強い敵であったのに、いったいどのようにしてダビデは、サウルを殺さずにとどまることができたのでしょうか。

### 3) 主がわが巖

1節で、「主がわが巖」と言っています。主が自分を守ってくれたと言っています。その主はどこから来られたか。10節。「主は天を押し曲げて降りて」来られました。押し曲げるというのですから、無理矢理にということです。降りてくる必要がなかったのに、主はどうしても降りていかなければならないと思ってくださいました。

降りてくださった主はどこに立たれたのでしょうか。10節後半。「暗やみをその足の下にして。」主の回りには何があったのでしょうか。12節。「主は、やみを回りに置かれた。」足の下も、身の回りもやみだらけです。いったいどうしてやみばかりなのでしょう。私たちがこうだからです。主の目から見ると、私たちは全員罪というやみを抱え込んでいます。

ダビデもそうでした。主に従わなければならないことは頭で知っています。しかし、サウルを憎む思いがダビデを圧倒します。手が剣をつかみ、それをサウルの頭めがけて振り下ろしたい思いで一杯です。どんな理由であれ、もしそれをしたら、主への反逆となります。

それでダビデは主に助けを呼び求めます。その結果、なんとか剣を振り下ろすことなく、大きな罪は犯さずに済みました。ところが、話はそれで終わりません。主は私たちの本当の姿をあらわにします。海の底があらわれるようなことが起きました。

### 3 海の底が現れる

#### 1) サウルの衣の裾を切り取る

ダビデは、我慢ができなくて、一つだけしてしまったことがありました。サウルの衣の裾をこっそりと切り取り、自分がすぐそばに隠れていたという証拠を残します。サウルのいのちがダビデの手の中にあることを見せつけるためです。最初は、それくらいのことをしてもいいだろうと思っていました。でも、それをやった後でダビデは心に痛みを感じます。そのとき、ダビデが立っている地は揺るぎ、海の底が現れました。いったい何が起きたのでしょうか。サウルを殺してはならない。

ぎりぎりの決断でした。でもやっぱりどこかに無理がありました。どうしてもサウルに仕返しをしたい。その思いを止められなかった。そのときダビデの本当のやみがあらわれました。高ぶる者とは自分のこと。そのことを知らされます。28節後半。「あなたは、高ぶる者に目を向けて、これを低くされます。」

## 2) 低くされるダビデ

そのダビデはどのようにして低くされたのか。そのことを最後に見ていきます。岩の陰に身を隠していたダビデは、サウルの前に出て行きます。そして今自分がしたことをそのまま正直に告げていきます。簡単にできたことではないでしょう。どうして自分がサウルに頭を下げなければならないのか。最初はそう思っていました。

でも、やがて知らされました。主は何をしてくださったのか。やみを足の下にして、やみを回りに置かれた。この方は、なにも文句も言わず、むしろ私たちよりも低くなられて、私たちの罪を引き受けてくださったではないか。まるでこの方が罪人であったかのようなお姿を十字架で示してくださったではないか。そんな貧しい姿とられた主のお姿を見たとき、ダビデは低くされます。低くされたときこのように告白します。29節。「主よ。あなたは私のともしび。」

まるで突然海の底が現れるかのようにして、自分の中にあるひどいやみや罪が立ち現れました。そのとき、初めてこの方が私たちのともしびであることに気がつきます。

この方は、どのようにして私たちの歩む道を照らすのでしょうか。力でしょうか。能力でしょうか。私たちの誇りでしょうか。いいえ。すべてのものをうち捨てて弱くなられ、十字

架につるされている主の貧しいお姿が、私たちの道を照らしてくださいませ。

歩むべき道を見失うようなとき、私たちは再び主の十字架を仰ぎ見たいと思います。